

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370077

研究課題名(和文) ドイツ神秘思想のマリア論 処女降誕をめぐるマリア図像と神の子の誕生論

研究課題名(英文) Mariology in German Mysticism: The "Birth of God" Doctrine Approached by the Marian Iconography

研究代表者

田島 照久 (Tajima, Teruhisa)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：50139474

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、中世のドイツ神秘思想家マイスター・エックハルトの「魂の内における神の子の誕生」の教説を、キリスト教伝統のマリア論の観点から解釈するものである。マイスター・エックハルトの中心的教説である「魂の内における神の子の誕生」は「魂におけるマリア論」として解釈されうるものである。魂のうちで神の子の誕生が生起するためには、魂は処女でなければならないとされ、魂の処女性が「魂の離脱」として説かれるのである。そうしたエックハルトの思弁をマリア図像を手がかりにして解釈を試みた。

研究成果の概要(英文)：This study clarified the doctrine of the "birth of God in the soul," which is one of the central themes in the sermons of the thirteenth century German mystic Meister Eckhart, from the Mariological perspective. In this doctrine, Mariology is clearly found, for the "virginity," which is the most evident attribute to Mary, is said to be the necessary condition of the human soul for her conception of God. As the hermeneutical tool for approaching the typical Mariology in Eckhart, this study explored Medieval iconography related to the virginity of Mary.

研究分野：宗教哲学

キーワード：ドイツ神秘思想 中世哲学 宗教哲学 キリスト教図像学

1. 研究開始当初の背景

ドイツ神秘思想の中心的思想家であるマイスター・エックハルト (ca.1260-1328) は、その言葉の中から 28 箇所が抜き出され、内 17 箇所が異端的言説であると断罪された、ドイツ・ドミニコ修道会の最高位にあった神学者であるが、断罪された言説の内 7 箇所が「魂の内における神の子の誕生」の教説を踏まえた「神と人間の一致」に関するものである。近年、ドイツのポッフム大学を中心とした研究者によってこうした言説の背景にある知性論がその依拠する先行的資料と共に明らかにされてきており、当時の異端審問の正式記録である『アヴィニヨン鑑定書』の理解とは全く異なる解釈地平が開ける可能性がでてきた。

これまでに申請者は、異端断罪されたものの一つである「被造物は純然たる無である」という言説を「内的帰属の類比」構造を介して、存在論の地平で、整合的に解釈することを試みた(拙著『マイスター・エックハルト研究』1996年創文社刊、69-173頁)。

また平成 22 - 24 年の科研費研究では、キリスト教成立以来語られてきた「神と人間が一致する」というギリシア教父のテオシス(人間神化思想)の言説に注目し、「神人合一」を説くドイツ神秘思想の教説を、教義上神であると同時に人であるとされるイエス・キリストを画いた「キリスト図像」を手がかりにして、その意味を探った。その結果伝統的「キリスト図像」とくに「ブドウ搾り機の中に立つキリスト図像」がホスティア(聖餅)の形象を伴っていること等の分析から、位格的結合 unio hypostatica の教義にのっとってはいるが、キリストの人間の身体と不可分なペルソナに焦点を当てた受肉理解であるのに対して、エックハルトの受肉理解は人間的ペルソナ否定において、位格的結合の可能性と実現が万人に開かれた救済論的メッセージであることが確認された。

また「父から子の誕生」という神学的テーマが、ラテン語著作において「始原」と「始原から生みだされたもの」という「本質的始原論」の論理構造に従って、「義」(神の完全性)からの「義なる者」(義である人間)の誕生としてアナログ的に語られていることを確認し、その論理構造を追った。その結果エックハルトの主張と異端判定理解との間には明らかな乖離があることが明確になった。今般海外のみならず、日本国内でもエックハルト研究の単著が相次いで出版されるなど、エックハルト研究は活況を呈しているが、研究活性化の背景には、1936 年以來の批判版エックハルト全集刊行がほぼ完成を迎えようとしている状況がある。膨大な資料群が学問的検証を経て提供された今、新たなエックハルト解釈が次々と生まれてくる気配が漲っている。

テオシス(人間神化思想)というギリシア教父以來の伝統に光を当てることによって、

これまでキリスト教信仰の正統から異端視されてきたドイツ神秘思想を、キリスト教信仰の根本動機を継承する思想形態であると再評価することが可能になると考える。現在ヴァチカン教皇庁ではエックハルトの名誉回復の作業が進められていると聞く。こうした流れに呼応するならば、エックハルトの異端とされた言説を新たな解釈地平から見直す作業が必要とされるであろう。そうした研究の学術的背景に基づいて、本研究計画はドイツ神秘思想の中心的教説である「魂の内における神の子の誕生」をマリア論の観点から解釈するという新たな試みを目指すものである。

2. 研究の目的

本研究計画は、中世のドイツ神秘思想に見られる「魂の内における神の子の誕生」の教説を、キリスト教伝統のマリア論の観点から解釈することを試みるものである。

東方教会由来の熱烈なマリア崇敬は、マリアに関する聖書記述の少なさから、文学的性格を強く持つ聖人伝説『ヤコブ原福音書』(2C後半)等の強い影響の下、説教や図像を通じて民衆の内に浸透し、カトリック教会で展開したマリア論成立の原動力となった。「神の母」(テオトコス)の称号を受け、同時に我が子の死を経験する「悲しみの聖母」(マーテル ドロローサ)への崇敬は、民衆の一切の祈りを受けとめる中世キリスト教の実質的信仰内実を形成した。きわめて思弁的であるといわれるドイツ神秘思想の救済論もその根底にマリア論の枠組を持っていることをマリア図像の伝統を踏まえて明らかにしたい。

3. 研究の方法

本研究では一方で、ドイツ神秘思想の「魂の内における神の子の誕生」の教説テキストが聖母マリアの処女懐胎という枠組みに沿って分析解釈される。また他方では中世の民衆の願望を映し出している「受胎告知」の表出例の分析を通じて、類型化された図像を構成している個々のモチーフを探り出し、神学的な解釈と照らし合わせ、一般的理解の文脈を再構成する。その両者を比較校勘することによってドイツ神秘思想の「魂の内における神の子の誕生」のメッセージの独自性を浮き彫りにすることを目指す。神学・宗教哲学と、図像学という異なる研究領域での作業となるので、二つの領域に即した具体的なテーマおよび、方法が年次並行的に立てられることになる。神学・宗教哲学の領域では、ラテン語著作『ヨハネ福音書注解』で論じられている知性認識における「子」としての「スペキエス」(形象)理解を中心に、「本質的始原論」、「離脱論」が扱われ、図像学領域では「受胎告知」図像が収集・分析される。

4. 研究成果

本来極めて思弁的な「神と人間の一致」を表す「魂の内における神の子の誕生」という神学上のテーマを、本研究では絵画、彫刻という具体的表出、および個々の形象モチーフを提供する源泉となっている聖人伝などの民間伝承を手がかりに解明をこころみたものである。

「神と人間との一致」というキリスト教の中心テーマは、キリスト教成立当初のギリシア教父以来、いわばキリスト教そのものを成立せしめている根本動機として受け継がれてきたものであると考えられるが、それは本質的な二つの問に対する同じ一つの答として機能していると見ることができる。

一つは「イエスとは何者であるか」というイエスの身分に関する問への答であり、もう一つは「人間はいかにして至福たりえるのか」という人間存在の目標と完成に関する問への答である。前者の答として「神と人間の一致」は、イエス・キリストを神であると同時に人間であるとする、まさにカルケドン信経によって確立されたキリスト論の内実を意味するものである。後者の答として「人間と神の一致」は、「人間の至福は神との合一の内に存する」(マイスター・エックハルトの弟子グリュンディヒのエックハルトの言葉)ということ、すなわち「神と人間の一致」の内にこそ人間の生る目標である至福が存するという人間存在の完成の在り方を語るものである。そして両者の答は、三位一体論を確立したアタナシオスが「この方(ロゴス)が人となられたのは、われわれを神とするためである」と語っているように、範疇論的に一つに結び合わされる。すなわち神の受肉は人間神化のために生じたものであると受け取られていったのである。「魂の内における神の子の誕生」の教説は、ドイツ神秘思想の代表的思想家マイスター・エックハルトのドイツ語著作で繰り返し説かれる最も中心的なテーマである。とくに「ドイツ語説教2」は「ルカによる福音書第10章第38節」のマリア、マルタの姉妹がイエス一行を迎え入れた話の冒頭の箇所に関する説教であるが、まさに「魂の内における神の子の誕生」のテーマを扱っている典型的な説教である。しかも一読して明らかに聖母マリアの処女懐胎の教義を下敷きに説かれていると判断されるものである。

この説教においてエックハルトは婚礼を目的因に即して誕生と結びつけ、三通りの婚姻に対応させて三通りの誕生を区別している。第一の誕生における父母は字義の意味ののちとして父母ともにこの世のものすなわち被造物であるとする。第二の婚姻は神性と人性との間の婚姻であり、父は聖霊であり、母はマリアであることになり父を天に、母をこの世に持っているとして述べられている。ロゴスの受肉(托身)であり、神人イエスの誕生を指しているとして理解される。

そして第三の誕生は神と魂との間の婚姻によってもたらされるとされている。注目すべきことはこの誕生をもたらし父母はともにこの世にないとされる点である。この第三の誕生が「魂の内における神の(子の)誕生」を指していることは疑う余地はないであろう。父はこの世にない父なる神であるが、ではいったいこの世にない母は誰であろうか。エックハルトは、この婚姻に値するものとなるためには、人間はすべての変化しうるものと被造的なものを軽蔑することによって、すべてのものを超えて行かなくてはならない、と述べているので、こうした在り方が離脱に相応することは明らかである。すなわち第三の誕生におけるこの世にない母とは離脱という魂の在り方ということになる。そしてさらに、言葉が人間の本性を取った第二の結婚はわれわれが、神の子となりうることを教えるためであったと、第二の誕生であるキリストにおけるロゴスの受肉を、第三の誕生である「魂の内における神の(子の)誕生」に対しての範例として位置づけていることから、第二の誕生の母マリアは、第三の誕生の母である離脱の範例として機能していることがここから帰結されるのである。

以上のようにこの説教では「魂のマリア論」というコンセプトが確認されたのである。こうした解釈を踏まえて、この教説の分析を詳細に行うことができた。さらにこれと並行してラテン語による彼の主著『ヨハネ福音書注解』で説かれている「誕生論」の理論構造解析に着手するために、エックハルト独自の「スペキエス論」を探った。エックハルトは知性認識が成立するのは「可知的スペキエス」(可知的形象)と知性が一になることであるととし、このスペキエスは「対象から生み出された子」であるととし、「魂の内における神の子の誕生」の原理的説明に充てているからである。

さらに「魂の内における神の子の誕生」の教説の論理構造の解明と「スペキエス論」研究の成果を踏まえて以下のような解釈に至ることができた。

エックハルトは「始原」(principium)と「始原から生じたもの」(princiipiatum)の関係を一方では、三一神論の父から子の誕生に即して、すなわち神の自己認識の問題として考察する。父と子両者は同一本質を有する者として「一なるもの」(unum)であり、同時に「生み出す者、父」と「生み出される者、子」の間のペルソナの区別に基づき、「一なる者」(unus)ではなく「他なるもの」(alius)である。こうした神論のテーマをエックハルトはわれわれ人間における認識の問題に投影し、父である認識対象から認識能力の内に生み込まれた子である認識形象ないし似像によって認識が成立すると説くのである。その際、父である「認識対象」と、子である認識形象を宿す認識能力の基体である「認識する者」とは質料を隔てて「一なる者」(unus)

ではなく「他なるもの」(alius)であるが、質料を除けば「一なるもの」(unum)である。注釈者(アヴェロエス)が言っているように、質料が存在しないならば、魂の内における浴槽と魂の外における浴槽は同一のもの(idem)であろうからである。その際に、子である似像(認識形象)を、アウグスティヌスの言葉に依拠して、認識する者と認識される者から生まれた「共通の子」として解釈するならば、認識する者と認識される者は、生まれた「共通の子」として認識において一であることになる。すなわち「能所の一」(能動受動関係における一致)として理解されるのである。この場合認識される者である父に対して、認識する者は認識を宿すもの、エックハルト自身言及してはいないが、母に当るであろう。子である似像(認識形象)において、認識する者と認識される者は一となる。これがドイツ語説教 48 で説かれている目即木材(ouge-holz)の比喻で語ろうとしていた内容になる。

さらにその「能所の一」理解を基礎とした上で、アリストテレスの同一現実態における視覚と可視の対象の一致という観点に従って、子である似像(認識形象)を宿す「認識する者」について更なる考察がなされるのである。アリストテレスに倣い、可視の対象は視覚の内にもみずからを生み込むとした上で、視覚がそれを形象として構成すると理解すれば、アウグスティヌスの「共通の子」という意味は、視覚と可視の対象との二人の父に「共通の子」とあることになる。「共通の子」は二人の父を持つ。共に父であるという一致の事態は「働きにおける一致」(父も子も同じ働きにおいて共に父である一致の事態)といえる。わたしの目と、まだ見ぬ海の彼方の羊の目との一致という話も「目と木材の比喻」に即したテーマなのであることがわかる。「目と木材の比喻」はこうしたエックハルトの認識論的思惟の射程を有しているである。認識論的問題領域に対して他方、存在論の領域においては、「始原」(principium)と「始原から生じたもの」(principiatum)の関係を、常に生み出されたものは、生み出すものに比べて、より劣った、より小なる、より不完全で、非同等的なものである、とする類比的な諸物(analogica)の関係としてとらえることによって、創造論に対して理論的基盤をエックハルトは「本質的始原論」の中で同時に与えようとしている。エックハルトの本質的始原論のコンセプトは、アルベルトゥス・マグヌスやトマス理解の伝統を引く「存在の始原と認識の始原は同一である」という『原因論』第二六節に依拠したテーゼを基礎としているからである。

以上のようにドイツ語説教で説かれている「目と木材の比喻」は覆いを除かれ露わになった魂が神を映し神の似像となることで神との一致を成就するという人間神化(テオシス)を、神との「能所の一」(能動受動に

おける一致)および「能作の一」(働きにおける一致)の両側面から語ろうとしたものであったと解釈できるのである。その際、神学的「似像」(imago)概念と置換された哲学的「形象」(species)概念が、認識能力・認識対象・認識形象という観点から上述のアウグスティヌスに依拠した「能所の一」とアリストテレスに依拠した「能作の一」とを同時に説明する要の概念として用いられていること、さらにその背後には「一義的範型論」を内容とする「本質的始原論」があることが明らかとなった。ここで語られた神との一致は、ドイツ語著作においては離脱の教説と結びついて説かれる「魂の内における神の誕生」というテーマに該当する。ドイツ語著作においては、さらに「造られざる、造られえざる一つの力、光」(魂の火花)による似像を介さぬ神との一致が、突破の教説としてさらに説かれてくることになる。一方ラテン語著作ではここで語られた神との一致は「義と義なる者」の問題として展開されており、その言説は「アヴィニオン異端審問」で異端断罪されることとなったのである。

さらに本研究では、マリアの処女性に対応する魂の不可触性とし説かれている「離脱」の教説をテーマとし、ドイツ語論述である『離脱について』のテキスト解釈に着手し、それを比較思想の観点から「仏教の三昧思想」特に禅宗のそれと比較考量して、宗教哲学の観点から論及した。この成果は2014年3月開催のMeister

Eckhart Gesellschaft と Erfurt 大学 Max Weber Kolleg 共催のミュンヘンでの学術会議 “Meister Eckhart - interreligiös” で招待講演者としてドイツ語で発表をした。演題名は “Die Abgeschiedenheitslehre Eckharts und der Samādhi-Gedanke im Zen-Buddhismus”

最後にギリシア教父以来の伝統であるテオシス(人間神化思想)を「魂の内における神の子の誕生」として受け止め、「処女懐胎」というマリア論の枠組みで構築していったドイツ神秘思想の救済論を、エックハルトの「本質的始原論」の内に定位することを試みた。さらに永遠の場である「始原」がトリアーデ構造(神の存在、子の誕生、世界の創造)をもって理解されていること明らかにした上で、「魂の内における神の子の誕生」が生起するとされる「魂の根底」が離脱の場として「始原」のトリアーデ構造を映し込んでいるという解釈をこれまでの研究結果としてまとめ上げることができた。

なお図像学領域の成果としては、ドイツ、ヴュルツブルク市のマリア聖堂の北側入り口上方には、注目すべき「受胎告知」の浮き彫りがある。天上に座す父たる「神の口」から一本の管が「マリアの耳」までのびているのである。しかも耳元で鳩の形に変形した管の上を幼児イエスが母親を目指して滑降している浮き彫りである。

神の子の受胎はマリアの耳を介して行われたという理解は古代末期のシリアの神学者エフライムにまでさかのぼるものである。旧約のエヴァの耳から死が世界に入ってきたように、マリアの耳からは命が世界に入ってきたとする伝統的解釈が背景にある。

こうした一連の「受胎告知」図像の内にはいわばキリスト教の教義的・文化誌的図像コードといったものがふんだんに輻輳した形で存在している。こうしたコード解釈を「イコノグラフィ」(図像学)の研究手法を用いて遂行し、キリスト教教義の民衆レベルにおける受容の姿を浮かび上がらせることができた。

さらに「悲しみの聖母」図像の構成モチーフとしてときにマリアの胸を刺し貫く剣が描かれるが、この典拠は、「ルカによる福音書第2章35節」にあるシメオンの言葉である。このモチーフについても図像の収集することができたが、とくにこの「悲しみの聖母」に関しては、ドイツ神秘思想の「離脱」の解釈と合わせて、「魂のマリア論」としてまとめることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

田島照久

エックハルトの用いた一つの比喩「能所の一」と「能作の一」をめぐって、『フィロソフィア』、100号、2013, pp.25-52, 査読なし。

田島照久

映し込まれた永遠-「魂の根底」と「始原」をめぐるエックハルトの場所論、上智大学哲学会編『哲学論集』第42号、2013, pp.23-52

田島照久

ドイツ神秘思想の依拠する神論の伝統、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第59輯、2014, pp.21-37、査読なし。

田島照久

ドイツ神秘思想の依拠する神論の伝統(承前)、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第60輯、2015, pp.39-54、査読なし。

田島照久

エックハルトの人間本姓理解 インマヌエルという観点から、『フィロソフィア』、103号、2016, pp.(1)-(22)、査読なし。

[学会発表](計 4 件)

田島照久

もう一人のエックハルト Eckhart von Gründig の知性論、日本宗教学会、2013年9月8日、「國學院大学(東京都渋谷区)」

田島照久

エックハルトの「突破」(Durchbruch)モ

ティーフの神学的根拠、日本宗教学会、2014年9月13日、「同志社大学(京都府京都市)」

田島照久

Die Abgeschiedenheitslehre Eckharts und der Samādhi-Gedanke im Zen- Buddhismus, Meister Eckhart Gesellschaft、2014年3月30日、「ミュンヘン(ドイツ)」

田島照久

エックハルトの人間本姓理解 インマヌエルという観点から、日本宗教学会、2015年9月5日、「創価大学(東京都八王子市)」

[図書](計 件)

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

田島 照久(Teruhisa Tajima)

早稲田大学文学学術院教授

研究者番号: 50139474

(2)研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者

()

研究者番号: